

# 第一章 旧石器時代

## 第一節 人類の誕生

### 生命の誕生

今を遡る四六億年前、私たちの住む惑星である地球は銀河系の中でその産声をあげた。ビッグバンと呼ばれる大爆発で宇宙が誕生した百数十億年前、その様子を詳しく知る術はないが、現代の宇宙科学はそのメカニズムをかなり詳しい部分まで解明している。その成果によれば地球を含む銀河系（宇宙空間に無数に存在する）が宇宙の膨張という過程の中で形成されたのはビッグバンから十億年後、そして四六億年前には恒星である太陽が誕生し、その影響を受け惑星としての地球が誕生したと考えられている。こうした惑星は太陽が誕生する直前に放った激しい熱により、より近い惑星は岩石質の地球型惑星として、そしてより遠い惑星は宇宙の主成分である水素とヘリウムで構成される木星型惑星として形成された。こうした惑星としての成立過程の相違が、その後の生命体誕生の分岐点となったのである。

では、我々人間を含む生命は、どのようにしてこの地球上に誕生してきたのであろうか。その条件は地球上に生成された水

と酸素、そして太陽からのエネルギーである。その結果、少なくとも三二億年前にはラン藻類の出現が認められ、その後長い時間を費やして進化が繰り返されることになる。そして、約二億六〇〇〇万年前には哺乳類へと進化し、六〇〇〇万年前には我々人間の祖先である霊長類が出現するのである。こうした地球の誕生から生命の進化へと至るプロセスは、その時間の尺度が現代生活とは余りにもかけ離れているために遠い夢物語と捉えられがちであるが、生命や環境問題という現代的問題を考える上で重要な情報として認識すべきである。

### アフリカの大地で

霊長類は哺乳類の中でも最も脳の発達した生命体である。その分類の中で我々人間と同じ仲間がヒト上科として分類され、更にテナガザル科、オランウータン科、ヒト科に分かれる。これらはDNAの共有度が高く、ゴリラ、チンパンジーなど類人猿と呼ばれる。そしてこうした類人猿からヒトへの進化が人類誕生の第一歩であり、その進化はアフリカで始まったと考えられている。旧石器時代とはこうしたサルからヒトへの進化が始まったときから、磨製石斧や土器が使用されるまでの時代をさし、これ以降を新石器時代と呼んで区別している。日本では新石器時代の開始を縄文時代と称している。更に、旧石器時代は前期（四〇〇万年～一三万年前）中期（二三万年前～三・三万年前）後期（三・三万年前～一・二万年前）に区分しており、ヒトの進化の度合い

と、石器などの文化的要素によって段階的に分けている。その生活の様子は狩猟採集経済と呼ばれ、自然界に生きる動植物を狩や採集によって食料とすることで成立し、生産活動を伴わない社会であった。したがって、特定の場所に定住することはない、食料を求め一定の集団で移動を繰り返していたとされる。

さて、ヒトの進化は一般に猿人（アウストラロピテクス）、原人（ホモ・エレクトゥス）、旧人（古代型ホモ・サピエンス）、新人（現代型ホモ・サピエンス）という過程を経るといわれ、その始まりは六〇〇万年前から四〇〇万年前と考えられている。最初に猿人へと進化をはじめた時期についてはミッシンゲルリング（失われた鎖の輪）の謎といわれ、諸説あつて定説化してはいないが、最近の遺伝子研究の成果として、およそ五〇〇万年間という推定もなされている。では、その進化を支えた条件とは一体どのようなものであったのか。

前述のように地球はその誕生以来様々な環境の変化を経て多様な生命体を生み出してきた。そして霊長類が出現するころには地上のいたるところに森林が出現しており、彼らは樹上の生活を主として安定した暮らしを行っていた。ところが、その樂園の生活を揺るがす大事件がアフリカの大地で発生する。約一〇〇〇万年前から始まった激しい地殻変動は大規模な台地の隆起を引き起こし、最大四〇〇〇mにも及ぶ山脈も誕生した。一方で大地の陥没により巨大な裂け目も形成されるが、それがア

フリカの大地を南北に切り裂くグレート・リフト・バレー（アフリカ大地溝帯）である。この地形の変化はアフリカの気候に大きな影響を与えたと考えられ、それまで大地を覆っていた森林に変化が生じ、この地溝帯を境としてその東に草原を作り出した。このことがそれまでの樹上生活とは違う草原での生活を行う類人猿の団を生む原因となり、やがて彼らは四足歩行から二足歩行というサルからヒトへの大きな進化の第一歩を踏み出すことになる。今から約七〇〇万年前、アフリカの大地での出来事である。

さて、現在知りうる最古の猿人は一九七四年にエチオピアのハダールで見えられたアファール猿人（アウストラロピテクス・アファレンシス）で、約三二〇万年前とされる。他にいくつかの種が存在するが、おおむね脳の容量は四〇〇〜五〇〇cc程度で、二足歩行はするものの外見はチンパンジーなどほとんど変わらないイメージと考えられる。彼らは定型的な道具を持たなかったようで、アフリカ以外の地域へ移動することもなく、少なくとも我々人類の直接の祖先とはなりえなかった。

約二四〇万年前になると、猿人よりも脳の容量が拡大した種が出現する。原人（ホモ・エレクトゥス）と呼ばれ、最初の種としてホモ・ハビリスが登場する。脳の容量は六〇〇〜七〇〇ccまで発達し、簡単に石を割った程度の粗製の石器を使っていたことが分かっている。ただ、こうした初期ホモ属（原人）の

# 第1章 旧石器時代

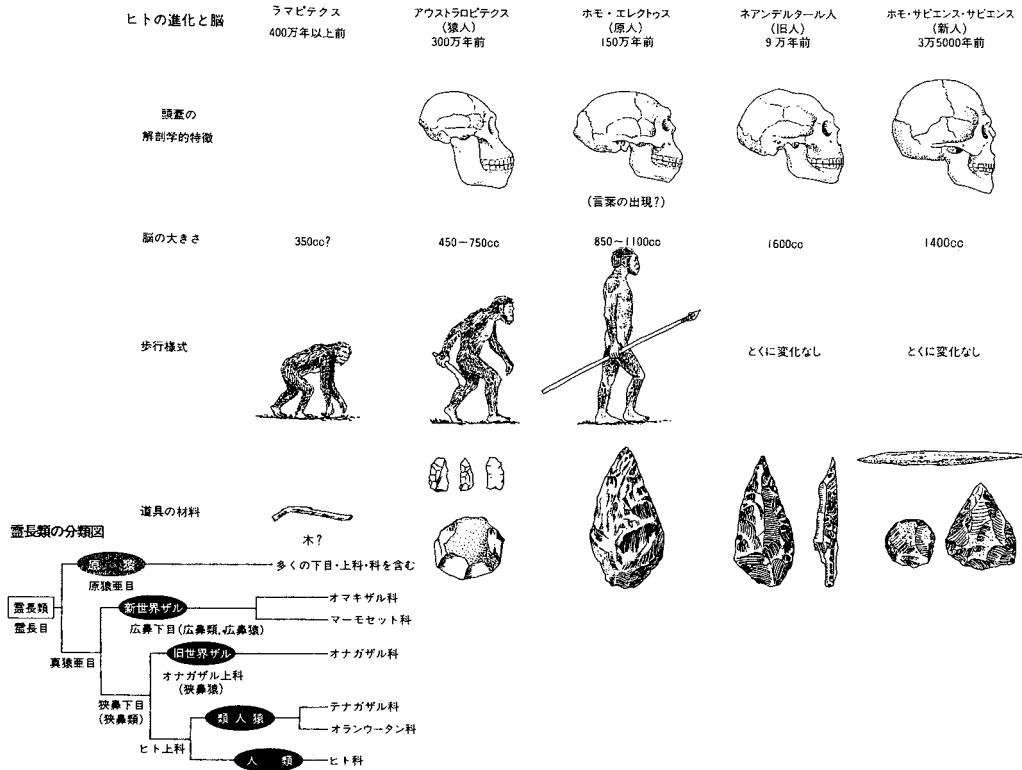


図2—1 ヒトの進化と霊長類の分類 (『生命 40億年はるかな旅 5』)

出現時期については異論もあり、確実に猿人との区別が明確になるのは約二〇〇万年前である。このころになると脳の容量は八五〇〜一一〇〇ccにまで増え、簡単な言葉も使用していたのではないかと考えられている。道具としての石器も発達し、狩猟や調理に適した石器の機能分化も見られる。そして限りなくサルに近かった骨格は、安定的な二足歩行を身につけるに従い大きく変化し、長くなった脚は長距離移動を可能にした。それまでアフリカの大地を出ることのなかったヒトは、ついにユーラシア大陸を目指し遙かなる旅をはじめたのである。ある集団は西を目指しヨーロッパへ向かい、また東を目指した集団は約一五〇万年前にはアジアに到着した(ジャワ原人)。更に彼らは大型の捕食動物を求めて北へも移動をはじめ、約六〇万年前には東アジアへも進出したと考えられている(北京原人)。こうした集団が日本にまで到着したかは定かではないが、少なくとも彼らは人類の直接の祖先とはなりえず、我々日本人の祖先もまた後の進化を待たねばならなかった。

## 世界への拡散

アフリカの大地を旅立った人々は世界各地への拡散を行い、約八〇万年前にはヨーロッパにたどり着いた。その後、それらの集団は更なる進化を繰り返し、ネアンデルタール人(古代型ホモ・サピエンスII旧人)が出現する。更に南アフリカでは一五〜二〇万年前に新たな段階を迎え、脳の容量を増した集団が更なる旅立ちをはじめようとし

ていた。ホモ・サピエンス（現代型ホモ・サピエンス＝新人）と呼ばれる彼らこそがその後の人類の進化を決定づけ、我々の直接の祖先となったのである。ホモ・サピエンスの特徴は何と云っても現代人とほぼ変わらないほどに発達した脳で、その容量は一三〇〇〜一五〇〇ccにまで達していた。そしてその能力は様々な環境への適応性を向上させ、次々にユーラシア大陸へと進出した。ある集団は南回りに東南アジアを目指し、四万年前にはオーストラリアにまで達した。一方、ヨーロッパから北へ向かった集団は中央アジアを経て三万年前には北東アジアに、更に極寒の地シベリアへと進出していった。なぜ彼らは困難に立ち向かいシベリアを目指したのか。その答えは増え続ける人口を維持するために、より大型の捕食動物を求めた結果と考えられている。いうまでもなく狩猟採集経済と言う最も原始的な経済活動を生きる糧としていた時代、生活の全てを支えるのは自然を相手とした食料の確保であり、対象とする獲物を追つての旅は生きることそのものであった。そうした彼らの行動は、やがて日本列島への人類の進出を促すことになる。今から約三万年前、いよいよ人類は日本列島への移動をはじめますが、それは画一的なものではなく様々な集団が幾度となく移動を試み、やがて環境に適応しながら独自の生活スタイルを作り上げてゆくのである。

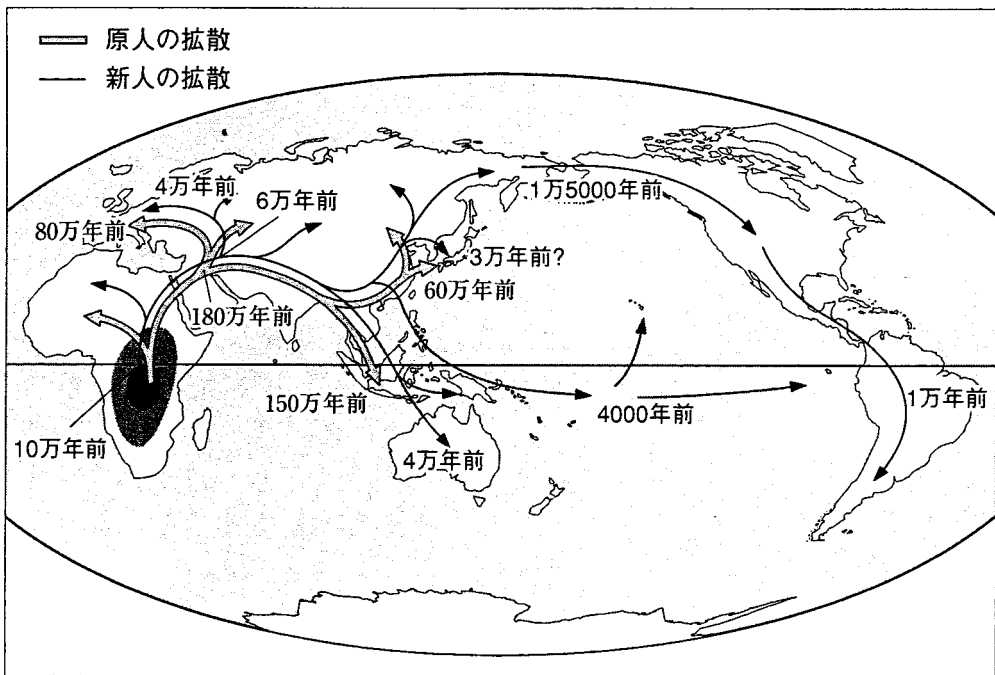


図2-2 世界への拡散（馬場 2001「日本人はるかな旅 2」2001 NHK）

## 日本列島へ

火山列島と呼ばれる日本では土壌の酸性度が高い、古い人骨はほとんど発見されない。しかしそうした中で唯一、石灰岩の地層は人骨を保存し、貴重なデータを我々に提供してくれる。現在、日本列島で発見されている人骨の中で最も古くかつ、全体の様子が分かるのは昭和四十五年（一九七〇）に沖縄県具志頭村で発見された。その地名から港川人と命名された化石人骨は、年代測定の結果、約二万年前のものとされる。身長は一五三センチで脳の容量は一三五〇cc、胴は長く足は短い。ホモ・サピエンスの中でも古い形態の特徴を有している。この港川人はどこから来たか、そのキーワードとなるのは近年提唱されている黒潮の文化圏である。

では、彼らが始めてたどり着いた三万年前の日本列島は、どのような姿をしていたのだろうか。近年、地理学や古地磁気学の研究は目覚ましく、当時の植生や地形の様子もかなり詳しくいところまで解明されている。従来、地球はその誕生以来四回の氷河期を経験し、その間に間氷期と呼ばれるやや寒い時期を挟みながら気候の変動を繰り返してきたと考えられてきた。しかし、その変動は世界的に決して均質ではなく、氷河期でも地域によっては暖かい地域も存在し、かつ、細かな寒暖の変化を繰り返したらしい。二万年前の日本列島周辺は最終氷期（ヴユルム氷期）で、北海道は宗谷海峡が陸化しサハリンと間宮海峡

を介しシベリアと陸続きであった。しかし、比較的深度の深い津軽海峡は完全に陸化したかは定説がなく、また、南の対馬海峡も最終的に朝鮮半島とは繋がらなかった。更に南西諸島も完全に陸続きになることはなく、基本的に周囲は海により隔絶されていたと考えられている。

一方、そうした中でこのころを境に日本列島では人類の活動を示す石器などの資料が増加し、ユーラシア大陸からの人々の進出が証明されている。その原因は当時アジアが寒冷化に向かう中、食料であるシベリアの大型動物の南下が、また、東南アジアでは人口の増加による圧迫が考えられている。これらを詳細に検討すると、おおむね日本列島に我々の祖先が渡ってきたルートは①シベリアからのルート、②北東アジアから朝鮮半島を経るルート、③黒潮に乗って西南諸島を伝うルートが考えられる。そして、それら象徴する石器として北からの集団は石刃技法による石器を、南からの集団は丸ノミ形石斧を携えていたと言われる。石刃技法による石器はそれまでの大型の石器と違い、より携行性を増し長距離の移動を可能にした。また丸ノミ形石斧は、海を渡る船を製作するうえで画期的な道具であり、当時日本列島に近づいていた黒潮の流れに乗って南からのヒトと文化の伝播を可能にしたのである。港川人の発見はまさにそのことを象徴するものかもしれない。

こうして、アフリカの大地を旅立ったホモ・サピエンスは、

十数万年の時を経てようやく日本列島にたどり着く。

## 第二節 日本の旧石器時代

### 研究の歩み

日本で旧石器時代の存在が認められるのは戦後のことである。そもそも近代日本考古学の成立も他の学問に比べ決して古いものではなく、明治十年（一八七七）エドワード・S・モースによる大森貝塚（東京）の発掘が嚆矢である。しかし、その後の日本の歴史観は容易に歴史学としての考古学の自由な発展を許さず、特に皇国史観による歴史の歪曲は皇紀元年（前六六〇年）以前の人類の存在に否定的で、その研究の自由が保障されるのは戦後のことであった。

昭和二十四年（一九四九）、群馬県岩宿遺跡が相沢忠洋によって発見され、日本列島に縄文時代より古い石器を主体とする文化の存在が明らかになった。それまでの日本の歴史では、縄文土器を含む地層より下位、つまり赤土（関東ローム層）に人類の生活の痕跡は存在しないというのが定説化しており、当時、行商をしながら熱心に旧石器を追い求めていた相沢が赤土の中から発見した石器は日本の考古学会に衝撃を与え、その後一気に旧石器時代研究が加速することになる。

一九五〇年には早くも杉原壮介、芹沢長介による日本の旧石器時代編年が発表され、その方向性を示すとともにその後の研

究の契機となつていった。事実、日本各地で旧石器時代の遺跡の発見が相次ぎ、九州においても以前からその存在が予測されていた佐賀県上場台地などで調査が開始される。そして、列島のあらゆるところから旧石器時代の遺跡が発見されるに従い、研究の方向は様々な分野からのアプローチがなされるようになり、その実態は徐々に解明されつつある。その方法論として石の形を調べるもの（形式論）、石器の出土状態から生活の様子を探ろうとするもの（分布論）、石器を作る方法の分析（技術論）、また、それらをふまえて社会構造に迫ろうとするもの（集団論）、地層の分析による年代の決定（火山灰の研究）、更には古生物学や古環境学による環境の復元、地理学や古地磁気学による地形の復元、そして遺伝子学によるDNA分析は日本人のルーツの解明に迫ろうとしている。

しかし、その全ての解明にはまだまだ多くの時間が必要で、日々の発見はその長い道のりを暗示している。つまりたかだか五〇年の研究で解明されるほど、我々の祖先の歴史は単純ではないということである。

### 前期旧石器時代論争

さて、旧石器時代が人類最古の文化である以上、最古の日本人はいつ日本列島に登場したかという答えは誰もが知りたいところである。

昭和六年（一九三一）直良信夫によつて兵庫県明石の海岸で発見された人骨は、その特徴からホモ・エレクトゥス（原人）